

芦屋大学論叢 第75号
(令和3年7月27日)抜刷

《実践報告》

自閉スペクトラム症者の社会参加・就労に向けた
コミュニケーション能力の育成について
—小学校入学時から就労までの指導と成果を追う—

浜 崎 仁 子

《実践報告》

自閉スペクトラム症者の 社会参加・就労に向けたコミュニケーション能力の育成について

— 小学校入学時から就労までの指導と成果を追う —

浜 崎 仁 子

1. はじめに

本稿は、小学校入学時に「あーあー」「ぼっぼ」等、数語の発語が見られた自閉スペクトラム症児童 A が、学校教育や職業教育を受ける中で成長していく姿を追った 20 年にわたる実践記録である。学校教育が始まる始期から継続的なコミュニケーション指導を行うことにより、障害がありながらも、できることを活かした社会参加の形を追い求めてきた。これまでの教育期間を、社会参加・就労へ向かう観点から①義務教育期 ②職業教育期 ③On-the-Job Training 期（以下 OJT 期と表記）に区切り、その時々での成長と成果を振り返る。

2. 問題と目的

筆者は、小学校で 38 年勤務し、そのうち支援学級担任として 15 年以上の経験がある。初めて教育現場に立った 1982 年当時、障害児は健常児とはおおむね別の場所で教育を受け、学校卒業後は措置制度による福祉施設への入居か家で過ごす事が多かった。1994（平成 6）年のサラマンカ宣言から始まったインクルーシブ教育はその後の我が国の障害者施策にも大きな影響を与え、教育分野では 2003（平成 15）年に内閣府による障害者基本計画で個別の支援計画が示された。2004（平成 16）年には文科省より「小・中学校における LD（注意欠陥/多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制のガイドライン（試案）」で個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成が示され、2005（平成 17）年には中央教育審議会答申で個別の支援計画の作成について示された。福祉分野では、障害者基本法、障害者基本計画も改正を重ね、2006（平成 18）年に国連で採択された障害者権利条約についても我が国は 2014（平成 26）年に批准している。

自閉スペクトラム症 A（以下 A）の母親は A の小学校入学に際し「地域で子どもを育てたい」との強い願いを持っていたが、その後の将来像は描けずいた。一方筆者は支援学級担任として税金を使う障害者としてではなく自分の能力を活かした「税金を払う大人」として社会参加することをめざしていた。入学前から入学前相談という形で A の母親と語り合う中で、「地域で生きる」「税金を払う働く大人になる」という二つの事をテーマに A の教育を行いたい、と話し合った。

本実践記録は、日々の指導で工夫したことや小学校卒業後も関わりを持ち続け成長を見続ける中で、気づいたこと見えてきたこと等を振り返り、自閉スペクトラム症者である A へ継続的な指導や支援を行うことを通して、集団に適応し就労に結びついた事例を提示し、これから障害児者に関わる方への一助となることを目的とする。

3. 方法

小学校・中学校時代の支援学級の連絡帳、小学校・中学校・支援学校高等部の通知表、就労移行支援事業所での個別支援計画等の資料を活用し、これまでどのような指導を継続してきたのか、その成果はどうであったのかについて、20年間の記録を読み解く。また、母親へのインタビューや筆者の経験も必要に応じて活用する。

これまでの教育期間を、社会参加・就労へ向かう観点から①義務教育期（小学校入学から中学校卒業まで）②職業教育期（支援学校高等部入学から就労移行支援事業所修了まで）③OJT期（就労開始から現在まで）に区切り、その時々で大切にしてきたことや指導方法を概観することで、集団への適応や社会生活に必要な技能などについての成長（成果）との関連を見出す。

3.1 対象

平成5年生まれの27歳男性A。療育手帳 総合判定A 4人兄弟の2番目。

1歳半健診で呼んでも振り向かないことから、母子医療センターにて検査、自閉症の診断。その後保育園入園。地域の小学校入学時より支援学級在籍。7歳3ヶ月時に、新版K式検査にて、2歳9ヶ月の発達だと言われる。

小学校卒業後、地域の中学校へ進学し支援学級在籍。中学校卒業後、支援学校高等部進学。18歳2ヶ月時に、WISKⅢとHTPテストを受ける。WISKⅢでは得意な事と苦手な事の差が大きく、見たものを再現する力や集中力はあるものの、視覚情報の弁別や情報を組み合わせることで推測することや言葉による指示や意味理解は難しい、と言われる。HTPテストでは、人に対する関心はあるが複雑な人間関係を理解することは難しい、と言われる。高等部卒業後、就労移行支援事業所に通い実習を積み重ね、1年5か月後（19歳11ヶ月）、現在の就労場所である特別養護老人ホームでシーツ交換の仕事に就く。7年を超えて現在も就労が継続している。

3.2 筆者と対象者の関係

筆者は、Aが小学校入学から卒業まで支援学級担任として6年間関わった。小学校卒業後も小中交流（地域の中学校と小学校との継続的な交流活動）で成長を見続け、支援学校高等部に入学すると同時に、筆者の家で畑の世話や作物の収穫、水まわりの清掃などをアルバイトとして月1回から2回の割合で行う姿を見続けてきた。ガイドヘルパーを活用して公共交通機関を利用し、社会体験を広げるための活動でもあった。いつしかガイドヘルパーなしでも通えるようになり、現在に至る。

保護者からの相談も継続的に受け続けており、進学や就職の相談からAの兄弟や家族の事にいたるまで、信頼を寄せていただいております。その関係は現在まで続いている。

3.3 倫理的配慮

本実践報告を作成するにあたり、本人と保護者に対して、データの取り扱い及び実践報告の公開等について、説明を行い、了承を得た。

4. 結果

4.1 教育期間別の取り組み（連絡帳・通知表・個別支援計画等の資料からエピソード記録を抜粋）

4.1.1 義務教育期（小学校・中学校）

（1）1年生

小学校入学時、Aは、自分の要求を伝えるための言葉やコミュニケーション行動は、お気に入りのきかんしゃトーマスを表す「ぼっぼ」と「あーあー」と言いながら身振り手振りで示す事であった。そこで、身振り手振りの要求行動が出た時、その要求に応えながら身振り手振りが指し示す名詞や動詞を意識してのせていくようにした。また、インリアルアプローチやマカトンサインを取り入れ、反動的に言葉を返したり、言葉と身振りを同時に提示したりした。「やりとり」によるコミュニケーション能力を育てる取り組みである。

ある日の事、教室でお道具箱を持って移動しているときに、躓いてお道具箱を落としてしまい中身が散乱した。ガッシャーンという音と同時に、びっくりし困ったのだろう、初めて「せんせい」と助けを求める言葉が出た。即座に困ったことの解決に当たると、その後「せんせい」は要求行動における定番の言葉になった。そして1年生の終わりごろには、自分の名前を言う事ができるようになった。トランポリンでピョンピョンと跳ぶAにあわせて「いち、に、さん、し」と声かけを続けているうちに「ちーにーにーにー」と真似をするようになり、徐々に数唱もできるようになった。「せんせい」「おーい」「あか」「ここ」「あっち」「いや」「はい」「ぶー」「しーしー（おしっこ）」等単語が少しずつ増え「せんせい、ぶー（先生、車で遊んでもいい?）」「せんせい、ここ（先生、ここに来て）」と二語文で話す事ができるようにもなった。

家庭では、入学から1ヵ月がたち生活に慣れた頃に、母親の目を盗んで自転車で外に出かけ、お金を持たせていないのに口紅を付け商品の入ったコンビニの袋を持って帰ってきたり、知らない人の家に上がり込んでおもちゃで遊んでいたりと、という事が頻発した。中華料理屋でラーメンを食べ、警察から連絡がきたこともあった。母親はショックを受けていたが、これを地域で生きるためのチャンスととらえ、新たな行動パターンを身につけるためにできることをしようと話し合い、以下の4点を実行する。

- ① コンビニや近所のお店にAの事を知ってもらい、何かあったら連絡してもらおうように電話番号を伝えておく。ご近所のお宅にも同じように説明にあがる。
- ② 一緒に買い物に行き、物とお金の交換が必要だと理解させる取り組みを進める。
- ③ ひとりで出かける時にはタイマーを持たせ、ピピピと鳴ったら家に帰る合図だと教える。まずは兄と一緒に使えるように練習する。
- ④ お助けカードを用意して、困った時には大人に知らせるといい事を教える。迷子札としても使える。

以上の事を家でも学校でも取り組む。学校では週に一度の校外学習で買い物学習を取り入れたり、タイマーを使って時間の感覚を知ったりする活動を取り入れた。

その結果、派出所のおまわりさんとも仲良くなり、物とお金の交換についても理解できて父親や兄弟と一緒に買い物を楽しめるようになった。新たなご近所さんとの付き合いも広がりAの理解者が増えて行くと同時に母親の世界も広がった。そして、タイマーを使うまでもなく、いつしか外で困ることはほとんどなくなっていた。

家庭内では、母親の料理をする姿に興味を持ち、一緒に野菜を切って鍋に放り込んでいき闇鍋状態に。苦笑いしながら「自分の子が作ったんじゃないかなったらよう食べんなあ」と食べる父親。温かい家庭が目に見えよう。

(2) 2年生～3年生

2年生になり、内的言語がどんどん増え、こちらの言う事はおよそわかるようになるが、表出言語はそれほど出てこない。ひらがなの読み書きを練習し、2年の終わりにはほとんどひらがなが読めるようになり、本を開いて一文字ずつ読むようになる。四男となる赤ちゃんが生まれ、それをきっかけに人に興味が出てくる。一人遊びから兄弟で遊んだり弟の様子を気にしたりするようになる。しかし、人に興味が出てきたことは嬉しい事だが、友達顔をピシャ！と叩くことが始まった。自分の行為に対して必ず反応があることがパターンになってしまったのか、ニコニコしながら叩くことも気になっていた。これについては、厳しく叱ることと同時に、通常学級担任の協力を得て「意地悪で叩いているのではない。一緒に遊びたかったり何か伝えたかったりするけど上手にお話しできないので、なあに？と聞いて、どうしたいのか気にしてあげて」とクラスで話していただいた。

生活の中で活かせる学習をめざし、アニメのポケットモンスターを使ってカタカナを、パソコンを使ってひらがなや計算・パズルや色塗りを、毎日の学習課題として取り入れた。イベントとしては、買物学習に出かけたり、自分たちで作った製作物や育てた野菜を売るお店を開いて先生方に買ってもらったりして、お金のやり取りを身につけていった。合わせてお金の種類を学習し、3年生の終わりには区別が付き徐々に買い物で活用できるようになった。

家庭とも連携して、経験を積み重ね、慣れた駄菓子屋とコンビニはひとりで行って買い物をすることができるようになった。ボランティアさんを募って一緒に外出したり、近くの児童館の活動に参加したり、Aの母親はできる限り地域の中で体験を積み重ねようとしていた。

発語も徐々に「せんせ～、〇〇、行こう～」等、三語文が出るようになり、身振り手振りの要求行動から単語で要求する事ができるようになってきた。「ありがとう」「ごめんなさい」を場に応じて自然に言う事ができるようになり、「お祭り行くの？」と聞くと「そ～りゃ～、そ～りゃ～」と掛け声で行くことを伝えたり、ブロックが散乱しているのを、「どうしたの？」と聞くと「〇〇バーン、△△怒る（〇〇君がわざとバーンと積み木を壊して△△君が怒った）」と説明したりする事もできるようになった。家庭でも弟があちこち動くと「こっち」と声をかけたり、泣いていると「あった」とお気に入りの本を渡したりする行動も見られるようになった。嬉しい時に「やったー」と気持ちを表す言葉が初めて出た。

通常の学級で、朝の会でのスケジュール確認や帰りの会での挨拶等、自分の役割を得て自己有用感が育つ。支援学級でも給食献立のカード貼りの役割を担い、責任を持つことも理解しはじめた。食に興味があり、支援学級での調理学習は嬉々として取り組む姿が見られた。家庭での料理の手伝いも続いている。

(3) 4年～6年

4年生になると単語がたくさん出るようになった。単語を話すことで相手に伝わる経験が言葉を増やしていき、1年生の頃が嘘のようによくしゃべるようになった。ピーターパンの本の読み聞かせをすると「ピーターパン、まほう、わに、にげろ、かんだ、アーン」と筋に沿った内容を話し、それをそのまま書いていくことで作文の学習となる。すぐに「マラソンはした。がんばった」など文の形で書けるようになった。「おいしかった」「たのしかった」などの気持ちを表す言葉も作文の中に出てくるようになった。6年の運動会の作文は、誰の助けも借りずにひとりで「トラックをはしたね。おうえんをしたね。いすをはこんだよ。しんどかったね。くみたいそうをやったよ。…」「おひるごはんをたべたよ。おべんとうをたべたね。おにぎりをたべたね。たまごやきたべたよ。ソーセージをたべたね。…」と原稿用紙2枚にわたり、1行にひとつずつ、したことや食べたものを綴り、最後に「ぼくはたのしかったね。」と結んでいる。

4年生の秋ごろから家庭で、食器洗いをして戸棚にしまう、お風呂洗いをする等、自らお手伝いをするようになったことをきっかけに、同じ時間に決まった作業ができるお風呂洗いをAの分担として任せることを提案する。毎日午後6時から掃除をすると決め、きちんと取り組み、自己有用感が高まった。逆に6時から掃除ができない状況だと涙を見せて抗議することもあったという。またトイレトペーパーの交換をし、在庫の確認もして母親に伝えることもできるようになった。家での料理経験も増え、5年生ではおにぎりを作ったり、6年生になるとピザトーストを一人で作って朝食にしたりすることができるようになった。学校でも、収穫したジャガイモでベーコンポテトを作る時に、調理の手順や危ない包丁さばきに驚いた。

コミュニケーション力にも伸びが見られた。「行く」「やめとく」と意思を伝えることができるようになり、自立活動の時間に教師を相手に開いた収穫物や制作物の販売店ではA「いらっしやい」T(教師)「いくらですか？」A「ひゃくえん」T「これください」A「ありがとうございます」等のやり取りができるようになった。計算は十分ではないがお金の多寡がわかるようになり、近所のコロッケ店にお使いも行けるようになった。地域での居場所も自分で見つけ、挨拶をしている。

5年生のある日の連絡帳。Aの母親が「いろんなところにAの成長が。こんな日が来るなんて思ってもみなかった。ロールパンに焼きそばを挟んでいると手伝ってくれるのは他の兄弟ではなくA。Aがいるからっていろんな事を諦めていた自分。でも今はAがいるから大丈夫、って思えることも増えました」と記していた。学校でも決められた係活動をきちんとするA。記憶力抜群でお世話係のA。支援学級でも頼りにしている。

卒業式前日、いつもうるさいくらい喋るのに、この日は早々に布団にもぐりこんだA。母親からの連絡帳には「学習面も生活面も成長したA。この6年間で心もしっかり成長していたんです。カレンダーに おわかれと書いてありました。わかっているんですね。」こうしてAは堂々と卒業証書を受け取り卒業していった。

(4) 中学校

小学校との連携を密にしながら、地域の中学校での生活が始まった。小学校と中学校の交流会(小中交流)で一緒に活動したり、地域での催しに小学校と中学校がともに参加したりして、Aの成長を見続けることができた。

入学時、中学校の運動靴が紐靴のため、小学校6年時より靴紐を結ぶ練習を始めたのが実を結び、みんなと同じように紐靴を履いて通学できたことは満足感があったようだ。家の鍵を持たせる試みも進めた。Aの帰宅時に鍵をかけ、母親は家の中に隠れていて、ひとりで鍵を開けて家に入り、内側から鍵をかけて荷物の片づけなどをする、という練習を重ねた。一人でテレビを見たり本を読んだりする余暇活動をすることができ、母親も安心して下の弟たちのPTA活動などに参加できるようになった。

このころから始まったガイドヘルパーの申請もして、バスに乗ってショッピングセンターに出かけたり、好きな物を食べにお店に入って注文したり、地域のあちこちに出かける楽しみも増えた。

中学校では生活に必要な学習に重きを置き、国語では漢字学習と作文、数学ではお金や時計の学習に力を入れた。掛け算の学習は九九はある程度覚えたが生活で使えるようにはならなかった。時計がわかるようになると時間へのこだわりが厳しくなり、兄弟が時間を守らないとしつこく向かっていきトラブルに発展することもあった。徐々に融通が利くようになってきたが時間へのこだわりは現在もあり、たまに対応に苦慮することもあると母親は言う。しかし、社会人として時間を守るという長所としての面が大きい。

3年生になると、面接の練習で、自宅の住所や電話番号を言えるようになり、学習を重ねることで、「です」「ます」等日常会話の丁寧な受け答えもできるようになってきた。

買い物学習では、割引シールのついているものを選び、担任が苦笑いする一幕もあった。自分で判断して

買い物ができるようになった証である。ただ、スーパーやイベント会場に出かけると勝手に動き回り、いなくなるのである。家族は慌てて探し回るが、本人は迷子になっているつもりはなくどこからか現れて家族はホッとすることも度々あったらしい。最終的には信頼して独り歩きを任せることで何も問題がないことがわかった。

公立高校の受験（知的障がい生徒自立支援コース：高等学校のカリキュラムや授業内容を工夫し、知的障害のある生徒が生き生きと学び、障害のあるなしにかかわらず、ともに高校生活を送り、交友を深めていくことをめざす自治体の取り組み）に挑戦するも不合格、涙をのんだ。母親の連絡帳には「番号のなかった時の目、悲しい表情で『(番号が) ない』と言った事、私の手を握りに来た時の事、ずっと忘れないと思います。貴重な体験ができたこと感謝しています」と綴られていた。

卒業前には携帯電話を持たせ、電話を受ける、電話をかける、メールをするなど練習を重ね、連絡先も増えた。たくさんの友人や先生に見送られながら卒業した。

4.1.2 職業教育期（支援学校高等部・就労移行支援事業所）

（1）支援学校高等部

地域の支援学校に進学。高等部入学を機に自力通学の訓練を行い、学校との往復についてはひとりで電車に乗って通うことができるようになった。

高等部では、自分の身の回りの出来事を話したり理解したりする事、時計を確実に読み、時間の感覚を身につける事、お金の計算や金種の合理的な出し方等、社会で必要となる学習を積み重ねた。場に適した言葉を使えるよう継続してソーシャルスキルトレーニングを受け、一問一答には応えられるがまとめて話すことは難しいという事もわかった。何ができて何が難しいのかわかることは社会に出た時に周りからの働きかけの配慮に活かす事ができる。長所としては他者を不愉快にさせない対人関係の距離がとれると評価された。また、職業教育として職場体験実習や職場実習を重ね、仕事をする意識が高まった。しかし、学校が行うビジネスマナー研修は「態度に落ち着きがなく聞こうとする姿勢に欠ける」「内容がほとんど理解できていない」等厳しい評価であった。想像力に課題があり知的障害を併せ持つ自閉スペクトラム症者にとって、座学で結果を出すことはハードルが高いという事である。

一般的に高校生になるとアルバイトをする生徒もでてくる。できる限りみんなと同じ事をさせたいという保護者の思いと、できることを活用して社会参加を、という筆者の思いから社会体験活動として筆者の家でアルバイトをすることとなった。内容は畑の世話や作物の収穫、水まわりの清掃などであり、月1回から2回の割合で行うことにした。行き帰りはそれまでも利用していたガイドヘルパーを活用し、事前に電話で連絡をすることにもチャレンジした。同じことを決まった手順ですることは自閉スペクトラム症のAにとっては安心する事でもある。少しでも社会に出た時に役立つようにと、挨拶や靴揃え、仕事としての清掃等、体験を積み重ねた。これをきっかけに、通帳を作って貯金をすることを教え、働いたお金で好きな物を買う楽しみも知った。いつしかガイドヘルパーなしでも電車とバスを乗り継いで通えるようになり、月ごとの作物の出来具合などを楽しみにしながら、現在に至るまで10年以上アルバイトは続いている。

（2）就労移行支援事業所

高等部卒業後は、就労移行支援事業所で訓練を受けることになった。

入所当初は、就職したいがどうしたらいいかわからない状態であり、事業所の支援計画書には、「施設内軽作業、清掃、施設外就労訓練に参加して、得手不得手を見つけていく」と記入されている。その後、引っ

越し業者の解体作業、石鹼工場、食器洗浄、おしぼりの検品等、実習を重ねる。

事業所では毎日、学習の時間が設けられており、国語と算数を中心に課題をして理解力を高めている。

就労移行支援事業所に通うようになったある日、台風による風雨が酷く、列車が運行中止となった時に、筆者の携帯電話が鳴った。電話に出るとAがいきなり「電車、とまった」と一言。筆者に電話してくるくらいだからきっと親には連絡が付かなかったのだらうと思い「今どこ？」と聞くと答えがない。「駅の名前は？なんて書いてある？」と質問を変えると「〇〇 △△ ××」と3つの駅の名前を言う。これは駅名標をそのまま読んでいるのだと気づき、「今から行くから、迎えに行くまで駅にいて」と告げて、真ん中の△△駅に向かうことにした。駅に向かう途中で、母親と連絡がついたらしく、それを知らせる電話が筆者に入り安堵した。その後母親と会って話す中で、困った時に助けを求められるようになった成長を喜びあった。

就労移行支援事業所からインターンシップで出向いた自立支援センターでのおしぼりの包装作業では、総合評価は3段階評価のCという厳しい評価だった。おしぼりの種類や汚れの判別が困難で、仕上げる本数も目標に及ばなかった。スピードを上げるように指示すると検品精度が甘くなり、検品の精度を上げるよう指示するとスピードがダウンする結果となった。

その後も就労支援事業所からいくつもの実習に行くが、なかなか就労に結びつかない日々であった。クリーニングの会社では、雇用を見極めるための実習まで進んだが、最後の最後で不採用の通知に涙をのんだ。

しかし、まじめに前向きに努力するAは、就労支援事業所に1年半通った後、ついにジョブコーチとともに実習でお世話になった老人ホームでのシーツ交換の仕事に就くことが決まった。Aの母親はその時の気持ちを「自分の仕事に責任を持つ。これから社会に出るAに必要です。まだまだゴールではありません。経験体験を重ね、それを糧にして更なる未来を期待します。進んだ道が正解！Aは働く大人になります。」と記している。

4.1.3 OJT期

働き始めて最初の給料日前、Aの母親から相談があった。「給料が銀行振り込みになる。今まで経験がないからどうやって理解させたらいいのか」と。筆者の家でのアルバイトも就労移行支援事業所での工賃もすべて現金支給だったことから親としての不安が先に立ったものと思われる。しかし、すでに金融機関の利用を経験していたため、通帳に記帳されたキュウヨの文字を見せたうえで、お金を引き出す経験を積み重ねて身につけることができた。最初の給料から筆者への仕事用鞆をプレゼントしてくれたことは大きなサプライズであった。

そのころから、筆者宅でのアルバイトにも大きな変化があった。「しつれいします」「さようなら」が中心だった挨拶に変化が現れた。仕事の前に「おふろします」「つぎトイレそうじします」「ピーマンとります」と告げたり、帰りには「おつかれさまでした」「おじゃましました」「ありがとう」「つぎ、〇日にきます」等、職場で覚えた人間関係を円滑にするための言葉が増えていったりしたのである。また、ちょっとした飴やクッキー等のお菓子を持ち歩き、心許した人に配ることで、自分なりのコミュニケーションのきっかけを作るようになった。就労により自分が使えるお金が多少なりとも増えたことと関係があるのではないだろうか。また、当事者活動のチラシを見せてくれたり、賞状を見せてくれたり、なにげない日常のやり取りができるようになったことも就労後の嬉しい変化であった。

就労から1年後には、就労移行支援連絡会から勤労賞として表彰され、立派な賞状をいただいた。5年後には就職先の施設長から、「とてもまじめで丁寧な仕事をされると現場の職員も喜んでおります。5年たった今もその姿勢は変わっていません。元気で愛らしい人柄も職員の癒しとなっています。これからもよろし

くお願いします」との温かい励ましの手紙をいただいた。現在、就職してからすでに7年を超え、療育手帳Aという重度の障害がありながらも、できることを最大限に積み重ねて、「税金を納める働く大人」としての毎日を送っている。

5. 考察

このように、Aはその時その時の発達に応じた、適切な社会性を伸ばすための指導や支援を受けて成長してきた。それを、「社会性を育てるための指導や支援の成果」として、指導や支援によってできるようになった事をまとめたものが表1である。

表1 社会性を育てるための指導や支援の成果

	指導支援内容	国語・算数数学	生活・自立活動（コミュニケーション）	家庭・地域との連携
義務教育期	小学校 低学年	言葉・数の基礎（物には名前がある・数を数える） ひらがな学習 数の学習 お金と品物の交換を理解する 音読・視写・身の回りの単語学習	挨拶・手洗い・衣服の着脱・食事の仕方 交通ルール・公衆道徳 カレンダー作り（手指の訓練・協応） 行事への参加（まわりを見ながら同じ場所で活動する） 言葉を使って意思の疎通を図る（単語→二語文→三語文）	地域での居場所づくり（近所の方、ボランティアさん、お店の人、おまわりさん等とのつながりを作る） 学校外活動やイベントに参加 家で調理に参加（鍋・カレー等）
	小学校 高学年	言葉でのやり取りから文づくりへ（原稿用紙2枚程度の作文） お金と品物のやり取り（お金の多寡の理解） 具体物を用いた計算（足し算引き算） 簡単な漢字を練習する	挨拶・返事・会話 カレンダー作り（季節を知る・パソコンの活用） 行事への参加・買い物学習・調理（周りの友達を気にしながら活動し、下級生に正確な指示が出せる） 紐結び	地域へボランティアさんと出かける 学校外活動やイベントに参加 パソコン・ネット利用 家事の手伝い（片付け・風呂掃除・調理等一人で行う） おつかいに行く
	中学校	接続詞や漢字を用いて作文を書く 繰り上がり繰り下がりのある足し算・引き算 生活に必要な時計・お金について学ぶ	挨拶・返事・会話（住所・電話・丁寧な受け答え） カレンダー作り（季節の理解） アイロンビーズ・刺し子・砂絵・レザークラフト等の作品作り（手指の訓練・プレゼント） 行事への積極的参加・買い物学習	鍵を使う 公衆浴場・公共施設の使い方 職場体験・イベント参加 ガイドヘルパー等の活用 携帯電話・メールの使い方
職業教育期	支援学校 高等部	身の回りの出来事を話す 日常生活で使う漢字を学ぶ 時計を正確に読む・時間の流れを理解する お金の数え方、使い方、合理的なお金の出し方を学ぶ	挨拶・返事・身だしなみ 乗り物のマナーや買い物の仕方 SST（場面に適した言葉遣い） 校内実習	公共交通機関の利用（自力通学） ガイドヘルパー等の活用 職場体験学習 作業所実習 アルバイト（社会体験活動として水回りの清掃・畑の世話と作物の収穫） 金融機関での入出金
	就労移行 支援事業所	毎日学習の時間があり、国語や算数の問題を を中心に学習し、理解力を高めている。	挨拶・返事・身だしなみ・マナー・ルール 館内清掃・施設内作業 ジョブコーチによる雇用前支援（仕事へのアドバイスとコミュニケーションの取り方のサポート）	当事者活動（食事会等） ガイドヘルパー等の活用 インターンシップ 施設外実習 アルバイト（社会体験活動として水回りの清掃・畑の世話と作物の収穫）
OJT期	就労先		挨拶・返事・身だしなみ・マナー・ルール スーツ交換の仕方 遅刻や欠勤時の電話連絡の仕方	当事者活動（カラオケ・食事会・ボーリング等） グループホーム体験 アルバイト（社会体験活動として水回りの清掃・畑の世話と作物の収穫） コミュニケーションツールとしての飴・お菓子の活用

その時その時でできることを増やし、社会性を育てるために、そのできることを活用した取り組みを探し、日々の学習の中に落とし込んでいくことで成長が見込める。知的障害者は、知的発達はやや緩やかにブレーキがかかるが、経験を重ねることによってできることは増えていく。うまくいかない時には、指導や支援のやり方を変えたり理解できる手立てを考えたりすることで、できなかったことができるようになることも多い。個別の指導計画や支援計画を活用し、幼い頃から「今できること」を活かして社会性を育てる取り組みを考えていければと思う。

学習を進めるにあたって、当初言葉が出ていなかった A には、物を示すときに言葉を添えたり彼の動きに合わせて言葉を重ねたりして、言葉の存在を知らせ言葉でのコミュニケーションの便利さと楽しさを理解できるように配慮した。徐々に言葉が出始めると、しゃべりたいだけしゃべれる場を設定してコミュニケーション意欲を育てていった。その後、徐々に場に応じた使い方を学び就労につながり取り組みとした。ひらがなカタカナ漢字学習と進むにつれて、作文として自己表現をすることも発達段階に応じた取り組みを進めることによりできるようになった。言葉と同様に数についても、トランポリンを跳ぶ回数に数詞を重ねることから始め、その存在を伝えていった。お金の計算や時計を読んだり時間の理解をしたりする事も、生活経験を広げる中で適切な時期を見極めて取り組むことで身に付いていった。

生活経験を広げるとひと口に言っても、これまで述べてきたように多くの困難を乗り越えなければならなかった。しかし、ピンチはチャンスという言葉の通り、興味を持ったことに対して「あれはダメ、これもダメ」と禁止するのではなく、やりたい事ができるような環境調整を行うことによって、ひとりでできることが増えて行った。この日々の取り組みが就労に結びつく大きな成果だったのだと信じている。

A にとっての就労に結びつく直接行動は、家庭でのお手伝いから始まった。始めは見よう見まねの掃除片づけ料理等、親に喜んでもらえる体験、そしてできることを活用してアルバイトとしてのお金を得る社会体験、その後は責任を果たす就労へと進んでいった。

このように、どんな小さなこともそこに自立への意味付けを行い、先を見て取り組むことが大切なのだということである。

6. 今後の課題

A について言えば、今後、親亡き後も地域でいかに自立して生きていけるかを模索していく時期に入る。当事者活動で仲間の生活を知ったり、グループホームの入居体験をしたりして、知識や経験を増やしている所である。現在はまだ施策としては存在しないが福祉的視点を持った健常者との共同生活（シェアハウスの活用）等も社会資源として考えていければと思う。

しかし、障害者個々人の社会性を育てるだけでは、住みやすい社会の実現にはならない。確かに A の成長に合わせるかのように法整備も進み、A の小学校入学時には個人的にボランティアを探してお願いにあがったことを思えば、利用できる社会資源も増えてきた。現状がようやく理念に追いついてきた格好だが、まだまだ人々の意識の変化は追いついていない。

人と人との意思の疎通に欠かせないのが、相互コミュニケーションの力である。障害の特性に応じた社会参画と、社会参画を可能にする意識改革を含む環境整備が必要である。まずは、指導や支援をする側が適切な相互コミュニケーションの力をつける事から始め、徐々に周りの人間がどう関わればうまく意思を伝え合う事ができるのかを、一人一人の特性に応じて考えていける社会になってほしい。この報告が、障害の有無にかかわらず、すべての人にとって暮らしやすい社会を構築していくための一助になれば幸いである。

参考文献

竹田 契一 , 里見 恵子 : インリアル・アプローチ 子どもとの豊かなコミュニケーションを築く, 日本文化科学社, 1994.

上野和彦他 : マカトン法入門, 植草学園教育研究所, 1989.

磯部美也子編著 松田祥子監修 : マカトン法への招待 21世紀のすべての人のコミュニケーションのために, 日本マカトン協会, 2008).